

## Charcot の臨床講義



Jean-Martin Charcot(1825-1893)は「神経学の父」と呼ばれ、神経学を学ぶ人ならば誰でも知っています。19世紀のパリ、サルペトリエール病院で神経学の教授を勤め、当時はまだ混沌としていた神経疾患について、膨大な数の患者診察と病理解剖を通じて、整理し、分類し、命名していきました。そして、火曜講義と呼ばれた臨床講義で、そこに集う世界の神経学を学ぶ人々にその知見を教授しました。

今では患者人権擁護の立場から行われなくなりましたが、かつての医学部では、大講義室に実際の患者に来ていただいて、大勢の医学生の前で教授が模範的な問診、診察を行い、診断の組み立て方、他の疾患との違いから治療法に至るまでを解説する臨床講義が広く行われていました。単に疾患を解説するのではなく、一人の人間が診察室に入ってこられて、出ていかれる間に行われる医療の実践です。現在行われているシミュレーターをつかった医学教育とは全く違った緊張感があり、私たち医学生が医師としての心構えを学ぶためにも貴重な経験でした。

講義する教授にとっても負担の多い授業であり、質問に対して患者からの予想外の回答があっても、臨機応変に対応する能力が問われる授業でした。中には教

授の診察中に突然立ち上がり、私たち学生の方を振り向いて「お前たち、俺をよく見て、しっかり勉強しろよ」と檄を飛ばされた患者もおられました。

病気の数は無限にあり、患う病人も無数おられます。医師にとって一つ一つの疾患、一人一人の患者の経験は何よりも大切ですが、実際の生涯での臨床経験には限りがあります。その厳粛な事実を謙虚に認め、医師たちは常に最新の文献に目を通すだけでなく、お互いに知見を語り合い、情報を共有し続けることで、明日、外来を訪れる未知の疾病に備えなければなりません。

この絵は André Brouillet が 1887 年に描いた *Une leçon clinique à la Salpêtrière* です。右下に写り込んでいる胸像と比べても巨大な絵であることがわかります。ほぼ等身大の Charcot が当時のヨーロッパの錚々たる神経学者たちを前に講義をしている様子が臨場感豊かに伝わります。

今でもパリ第五大学の図書館前の廊下にかけており、訪れた人は誰でも見ることができます。パリに行かれた際は是非立ち寄って、その迫力を実際に感じてみてください。